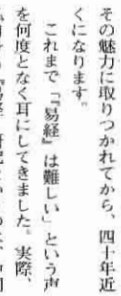
六月度致知読者の集い（木鶏クラブ本部例会）は、去る六月二十日（土）、講師に易経研究家の竹村亞希子氏をお招きし、東京・新宿の京王プラザホテルにて開催されました（参加者二百六十九名）。現在、官公庁管理職や企業経営者など各界のリーダーから多くのファンを集めている竹村氏に、五千年読み継がれてきた中国最古の古典である『易経』についてお話しいただきました。

六月度致知読者の集い

「人生にいかす『易経』の教え」

易経研究家　竹村亞希子



■四書五経と『易経』

私が二十代の初めに『易経』と出会い、その魅力に取りつかれてから、四十年近くになります。

これまで「易経」は難しい」という声を何度となく耳にしてきました。実際、私自身も『易経』研究というのは、中国古典の中では不人気分野で、他の業者が入ってこないスキマ産業みたいなものかなと認識しておりました（笑）。

ところが最近では、『易経』の講演会を行うと、以前にも増して本当にたくさんの方にお集まりいただけるようになってきました。また、私の著書も、多くの方にお買い求めいただいているようです。大変ありがたいことですが、一体どういうことなのでしょう。

これは、いまの時代がますます混沌としてきており、その中で『易経』が示す「時の法則」が世の中から強く求められているということではないでしょうか。

さて、ご存じの方も多いと思いますが『易経』は四書五経の一つです。四書五経とは、儒教の大切な古典であり、帝王学の書とされてきました。その中でも孔子以前に存在していたものが五経で、孔子の時代においては既に古典とされ、『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の順に成立しました。この五経の中で『易経』は最古のもので、筆頭に位置づけられていたといわれています。

『易経』の特徴は、「時」と「兆し」の専門書であるということです。おもしろいことに占いの書として発展したにもかかわらず、ある面では占いを否定しています。どういう意味かというと「『易経』を学べば、占わなくても未来が察知できる」ということなのです。「君子占わず」となるのです。

『易経』の読み方についてお話ししますと、『易経』に出てくる様々な話は基本的にすべて例え話で語られています。これを人ごとのように流してしまうと何の学びもありません。一つひとつの話について、何をメッセージとして送ってくれているのか、何を暗示しているのか、自分自身の体験と積極的に摺り合わせていくように読み、相対していきます。そうすると、突然、『易経』の言葉が生きてくるのです。

■「時中」……志は時に合ってこそ

『易経』は「時」の専門書です。この「時」とは何か。少し考えてみましょう。

春に種を蒔けば、秋の実りを得ます。ところが冬に氷の上に種を蒔くと、たとえその種がどんなに立派な種であっても、実ることはありません。場合によっては、その立派な種は腐ってしまいます。

改めて振り返ってみますと、私たちはこのように冬の氷の上に種を蒔くようなことをしたことがあるのではないでしょうか。人間は冬の時代にいるとつい焦ってしまい、じっとしているのが怖くなり、そうして種を蒔いてしまうものです。

これは「時中」ではありません。どんな立派な志を抱き、実現しようとしていても、「時中」でないと実現はしません。

■「龍」の六段階

『易経』では君子、すなわちリーダーを「龍」の変遷にたとえて説明しています。

龍の本来の力は、雲を呼び、恵みの雨を降らせることにあります。そして世の中を発展させ、循環を起こさせます。

しかし、龍はいつもその能力を発揮できるわけではありません。時に中らないと、雨を降らせることはできないのです。

家庭で、企業で、職場で、男女間で、あらゆる場でリーダーたる皆様も、ご自身がどの段階にあるか把握することで、出処進退のヒントを得られるのではないでしょうか。

①潜龍の時

――**確乎不抜の志を打ち立てよ**

『易経』に「潜龍用うる勿れ」という言葉があります。潜龍は時を得ず、実力も足りず、恵まれず、人から認められず、また何者でもない。

この潜龍の時は冬。何もしてはいけません。ただし、一つだけ、必ずしなくてはならないことがあります。それは「確乎不抜の志」を打ち立てることです。

そもそも人の志はぐらつき、変容するものです。この冬の時期、焦らず、無理をせず、認めてもらうことを考えるよりも、将来何をしたいのか、どんな自分になりたいのか青写真をしっかりと持ち、大きな志を抱くことです。

この冬の時に氷の上に種を蒔いても実りは得られません。

②見龍の時

――**大人の真似をし、形をつくる**

「見龍田に在り、大人を見るに利ろし」という言葉があります。この時代は、まだ基礎の段階で「形」をつくる時代です。師匠や大人の言うことをよく聞き、真似し、学び、そして「形」をつくるのです。

③君子終日乾乾の時

――**昼は積極的に動き、夜は反省する**

次の段階は「一日中、乾乾する」。プロとしての力をつける時です。

この「乾乾」とは、前へ前へ積極的に活動していくことです。ただし『易経』原文ではこれに「夕べに惕若たり」と続きます。夜になったら、きょうやったことは本当にあれでよかったのか、毎日恐れるくらいに反省しなさいということです。そうすると何が起きるか……。気づきと独自性、そして創意工夫が泉のごとく湧いてくると『易経』はいっています。

④躍龍の時――飛龍の一歩前。時を観る

君子終日乾乾で、実力を身につけた龍は、会社でいえば、いよいよ経営陣の仲間入り。取締役といったところです。

『易経』では、躍龍のことを「あるいは躍りて淵に在り」と表しています。つまり、淵に沈む龍のことです。

同時に大空を悠々と駆け巡る飛龍のほんの一瞬手前でもあります。「躍る」とは一瞬だけ空中にいて飛龍の真似をして、またもとの淵に沈む状態のことです。この時代のテーマは、どのように力をつければ飛龍になれるか、時を観る時期です。

⑤飛龍の時――順風満帆、大きな循環

飛龍の時は、非常に能力のある人たちを同志として統率しながら働かせて、大きな循環を巻き起こします。この時には何でもうまくいきます。すべての中心となり、周囲の見る目も違ってきます。

ところがこの時は、たくさんの人が寄ってきます。ゴマスリ、ご機嫌取りです。そんな人を重用し、逆に苦言を呈する人を嫌い、左遷したりしていると、まともな人は遠ざかり、小人だけが残ります。

飛龍の時に自分を客観視できず、確乎不抜の志を忘れると当たり前のようにそうなっていきます。それでも飛龍の時はうまくいってしまうものです。

⑥亢龍の時――不可避の失墜

昇りつめた龍は降るしかありません。飛龍には必ず驕り高ぶりが出て、謙虚さを失っていきます。飛龍はある日突然、気がつくと亢龍になっています。

龍本来の役割は雲を呼び、恵みの雨を降らせることでしたが、亢龍の周りには雲が集まらず、失墜への道を辿ります。

そうならないための飛龍時代の心がけが、「大人を見るに利ろし」です。見龍の時と違い、すべての人に学べと。さらに、次代を担う若い人たちに皆様が学んだことを与え続けることです。そして勇退後も、出すぎることなく、後に続く者たちに甘い雨を降らせ続ける、そんな意識を持ち続けることです。

きょうの話をきっかけに、『易経』から出処進退や、後進への譲り方といったものを、ご自身の人生と摺り合わせながら読み取っていただければと思います。

――講演要約抜粋――